

那覇市立金城小学校全教室公開授業研究会

那覇市でも新たな教育改革の旗が挙げられた。金城小学校の初鹿野校長先生が前任の銘苅小学校から今年4月に転任された学校で、新たな挑戦が始まった。2校時から4校時まで全クラス28クラスの公開と、5校時の焦点授業公開である。

『学びの共同体』って?、『学び』って? 教師達の不安や疑念を校長先生が受け入れることから改革の第1歩である。「一人残らず…」なんてほんとにできるの? 果てしない理想の追求である。「学びの共同体の学校改革は、単に教師の教え方や授業の方法論ではなく、教育の『理念とビジョンの実践』である。」

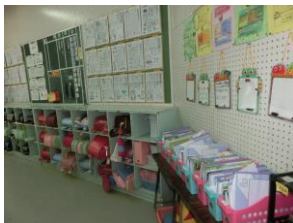
学校の役割ってなんだろう。子ども達にとって学校とは…。教師が教師であることを問う。教師としての在り方を問う。あなたはなぜ「教師になったのですか」教師達の挑戦は、自己への挑戦である。



左写真、職員室です。あなたは、どんな職員室を創りたいですか? それで上の写真、各教室が決まります。

【公開された教室から抜粋させていただきます】

[静然とした深い学びは整然とした環境でしか生まれません] …しっとり静かで安心できる教室を準備する。



3枚の写真、教師の子ども達を大切にしている姿が目につきます。「明るく元気に」だけ目が向けられると、必ず静かでおとなしい子が見つかります。「一人残らず…」にこだわると静かでおとなしい子も安心して

る教室の準備が鍵となります。この教室の環境を見て一番安心するのは、子どもと「親たち」である。

[仲間と聞き合い、支え合う。]

お互いの考えをすり合わせる。「同じから学び」「違いから学ぶ」低学年の子ども達が遠慮なく聞き合っている



まずは、授業の中で仲間との対話を教師の側から意図的に設定し「聞き合う」機会を提供してあげたい。

「分からなければ聞く」「なぜ?」「何で?」子ども達に関わり合う「言葉」をもたせたい。

[対話と協同的活動を授業に仕組む] 仲間と向き合う時間を設定する。



この教室は、子ども達が一人残らず向き合っている。…びっくりである。グループにボードを配布し仲間との協同活動を仕組んでいた。みんな必死に聞き合っている。「なぜ、どうして、だから。」思考はノートで深まるのではなく、まずは対話からである。自分とちがう他者の声から学ぶのである。



ボードの使い方についてはいろいろあります。

単にボードを使えばよいのではなくボードを使う目的や意図を十分理解して実践しましょう。

[子どもにとって居心地のいい教室を準備する]・・・学校は子ども達の学びのために準備される。

この教室の空気がいい。子ども達のくっつき具合を見てほしい。教師の視線と言葉が柔かい、子ども達は「安心」を獲得している。この教室の空気を、ぜひ全職員で解明してほしい…「同僚に学ぶ」



【他者の考えから学ぶ】… 他グループの考えや意見を聴く。

写真①、奥のグループから手前のグループに「なぜ？」が向けられた。互いの学びである。写真②、仲間に説明する。足りない言葉はさらに仲間が付け足していく。まさに互恵的な学び合い・支え合いである。写真③、共有する。「同じ考え」よりも「違う考え」を共有すると価値が深まる。



写真①



写真②



写真③

【分かってあげる】

教え育てるのではなく、「寄り添って分かってあげる」教師の側の辛抱強さが試される。焦りは厳禁である。



【5校時 焦点授業】 4年 国語 ひとつの花 授業者：M・Y

1:50 4年4組 M・Y先生の代表授業。

40名近い先生方の見守る中で教師の学びへの挑戦である。



教材研究が緻密にされている。子ども達の考えをどれだけ引出し互いの学びとすることができるのか。さらに子どもの声にどれだけ

耳を傾け、授業をデザインできるのか。金城小の新たな挑戦である。

1:54 読み 全員起立→一斉音読→終わったら座る。

「読み取り」の授業前半に読みは欠かせない。子ども達がどのようにお話の中に入り込んで行くかは、どれだけ文字や言葉に触れたかで決まるといっても過言ではない。たどたどしい読みの子が数名いた。ここでの読みの目的はスラスラ読むことではない、僕なりに、私なりに読み入ることが目的である。たどたどしい子ほどじっくり読んでいることを知ろう。



2:00 書き込み →「ゆみ。一つだけあげよう。…」 2:15 教師の問い：どうして一つだけなのかな？



授業者から最初の問いが下ろされた。子ども達は躊躇せず「聴き合っている」。まだ不慣れな子どももいるがグループの中央、仲間に体を向けて「対話」に向かっている。学びの質を探ろうと教師達もグループに張り付いて子ども達の対話に耳を傾ける。右写真のグループから「ゆみこがいつも一つだけって言ってからじゃない。」ほとんどの子が同じ見解であった。…もうちょい！



2:25 教師の問い：なぜ、一言も言わずに行ってしまったんだろう。→ グループへ

(5)の場面のクライマックスになるだろうか？教師の問いの声にも力が入る。しばらくグループで聴き合った後、教師がいくつかの例を黒板に書く。黒板に取り上げられたのはわずかな例であるが、ほとんどの子がグループ内で自分の考えを述べていた。

Aさん：「さよならって言って顔見たら、泣いてしまうかもしれないし、自分が悲しくなる。」

Bさん：「悲しむさ。最後に泣きたくないから・・・泣き顔見せたくない。」

Cさん：「体も丈夫じゃないから、もしかしたら帰ってこれないかもしれないから、最後にさよならっていうと、よけいに悲しくなるから何も言わないで行った。」



いいですね。子ども達はほんとに素直に考えていますね。しかも言い合うのでなく聴き合っている。子ども達の表情が抜群にいいです。おそらく教師の不安をよそに子ども達がお話の中に「読み入って」いるのだと思います。授業者は安心して子ども達の対話に任せてもいいですね。教師が「語ってほしいこと」はほとんどグループ内で交わされていたと思います。

M・Y先生、ありがとうございました。代表授業、緊張しましたか？そうですね当然ですね。先生が緻密な教材研究を重ねてきた事は前段での書き込みや、先生の「問い」や授業中の声を聴くとたいがい分かります。ほんとにお疲れさんでした。金城小での確かな「学び」の授業研究になったと思います。さて、教師の「分からせたい」コト、モノがある。子どもが感じる感性がある。文学作品に向かうとき私が絶対譲らない姿勢がある。「作品の解釈や分析よりも、この作品を子ども達はどのように楽しみ親しんだか。お互いにちがう感性を共有し、互恵的な学びの広がりや深まりを感じてほしい。」… 感動は作品と個人の空間に発生する。

国頭学びの会ゆい